札幌医科大学　医療人育成センター紀要　第９号　15 ～ 26（2018）　原著論文

離島における滞在型医療実習によって生まれる生き方への指針
－参加した１年生のレポートの「語り」を通して－

山田惠子

前札幌医科大学医療人育成センター、教養教育研究部門

本稿では、利尻島において行われた医学部・保健医療学部１年生を対象とした「離島地域医療実習」の受講生が、準備期間や振り返り学習を含めた全ての活動において提出した様々な記録の「語り」を素材として、学生の中に生まれた「変化」や「覚悟」を示す。学生は、実習先の担当者の熱心な指導、実習先の患者や利用者の笑顔、ありがとうの言葉、島民からの損得を越えた親切な待遇を受け、それらの島民の行為の根底には、自分達に「医療者として島に戻って欲しい」という期待や切なる願いがあることを感じとった。そして、島民から受けた恩に答えたいと思う気持ちが生まれ、実習後は、どのようにしたら恩返しが出来るのかという課題に向き合った。その結果、課題の答えとして、学生たちは、「これからの大学生活をきちんと生きる」、「人の心を理解するためのコミュニケーション能力を身につける」、「地域医療に対する関心を持ち続け、利尻島で学んだ学友と一緒に地域医療を学び続ける」という今後の生き方の指針を得た。

キーワード：離島地域医療実習、ナラティブ、レポートにおける「語り」、生き方の指針

1. はじめに

著者は、利尻島において行われてきた「離島地域医療実習」に長年関わり、参加した学生の学びや気づきについて報告してきた[1,2]。この企画の根底には、実際に現地に赴き、現地の人々の様々な暮らしを体験したり、そこに生きる人々と接することで、地域の特性や地域の人々の想い・願いを知ることができ、その体験が地域医療を正しく理解し、これからの自分達の生き方に対する目標を持つための大きな力となるだろうという考えがある。

この実習は地域滞在型の実習であり、専門的な学習を殆ど経験していない１年生を対象としているのが特徴である。参加を希望した学生は、全員、地域医療に対して一定の関心を持ってはいるが、全員が「地域で実際に暮らすこと」や「地域で実際に働く」ことを正確にイメージ出来ているとは言えない。そのような状況下にある学生が、実際に地域に赴き、医療の現場や島民とのふれ合いをする参加型の実習は、大学における座学の授業とは異なる学びを学生に提供出来ると考える。

学生は準備教育を経た後、実際に現地に赴き、すでに報告している３つの柱[3]を軸としたカリキュラムを通して、現地の医療体制にふれると共に、生活体験や自由時間に現地の方々と接し、さらには利尻島の海や山の自然の中で時を過ごした。帰学後は、現地での体験を振り返り、学びを共有するための「振り返り教育」として、グループ討議や発表会を行った。

この報告では、準備教育を含めた全ての活動において学生が提出した様々な記録における学生の「語り」を素材にして、離島地域医療実習の体験における学生が様々な場面で「感じたこと」、「思ったこと」、「学んだこと」、「感動したこと」などの経験を通し、学生の中に生まれた「変化」や「覚悟」を抽出する。

本稿では、学生の「語り」を軸に記すことで、学生の気づきや学びを表現する手法を用いている。学生がレポートや生活の記録の中で語った「語り」の部分がもっとも重要な資料である。著者は当初、文献１）や２）に示したものと同様の手法で解析を試み、その作業に数年という膨大な時間を費やした。しかし、実際に学生と共に利尻島で過ごしたことで学生が感じた心の動きを肌で感じていた著者にとって、その方法では学生たちの姿を十分に表現できないもどかしさがあった。そして、迷っている時にエスノグラフィという手法[4]に出会った。本来のエスノグラフィはフィールドで起

DOI: 10.15114/jcme.9.15

こる現象を記述して行う手法であるが、約1年間学生たちの学びを見てきた著者は、学生から提出されたレポートの分析に対してもこの方法が応用出来ると考えた。道信[5-7]が述べているように、保健・医療・福祉の領域に応用されるエスノグラフィはそれぞれの現場の特性に応じて柔軟にその手法を開発していく特長を持つ。そのため、今回の医療実習のように学生の豊かな記録が資料としてある場合には、エスノグラフィの手法を活用するのは理にかなっており、学生の語りを丹念に追って行くことで、読者が学生の学びや成長の過程をより深く理解するのを助けることが出来ると確信する。

2. 医療実習の現場と実習の概要

(1) 利尻島

利尻島は北海道の北部、日本海上に位置する周囲60 km、面積182.11 km^{2}の円形の島で、大学が位置する札幌から約300 kmに位置する。島の中央には「利尻富士」とも呼ばれる標高1,721mの利尻山がそびえている。昭和43年に東利尻町（現利尻富士町）鴛泊に大学付属臨海医学研究所（平成24年廃止）が開設されたことが、利尻島と大学との関わりのもととなっている。利尻島は利尻富士町と利尻町の2つの町からなっているが、主要な集落は鴛泊、鬼脇、仙法志、沓形である。鴛泊に鴛泊診療所、地域包括センター、鬼脇に鬼脇診療所、秀峰園（デイケアと特養）、利尻島老人保健施設、仙法志にほのぼの荘（デイケアと特養）、沓形国保中央病院、訪問看護ステーション・やすらぎ、高齢者生活福祉センター・希望の医療関連施設があり、今回の実習は鬼脇診療所を除く8施設の協力のもとで行われた。利尻島の主な産業は観光業と水産業（利尻昆布、ウニ、タコ、カレイなど）であり、島民の約40％が何らかの形で水産業に関わっている。

(2) 離島地域医療実習（8月実施、4泊5日）の概要

参加学生は学部混成の8名以内の小グループを作り、離島地域医療実習の3本の柱[3]に相当する「生物学実験」、「離島生活体験」、「医療実習」、「フォトボイス活動」「島巡り」、「国保中央病院院長の講演会と懇親会」に参加した。活動の具体的な内容についてはすでに報告されているものを参照されたい[1-3]。

実習参加学生は実習前にそれぞれの活動に対する「**自己目標**資料1」を、実習後に「自己目標に対する自己評価」および「実習全体を通してのふりかえり」から構成されている「**事後レポート**資料2」を提出した。さらに実習中、毎日「**生活の記録**資料3」を記載した。離島地域医療実習参加希望者には、地域医療合同セミナー1/Iの講義への参加が義務付けられた。

(3) 離島地域医療実習準備教育（4月～7月）と振り返り学習（9月～12月）

開講時、地域医療総合医学講座教員による「地域医療に必要なこと」と題する講演で地域医療の概要を学んだ後、学部、学科混在のグループに分かれ、自分のプロフィール「**地域医療合同セミナー・学生プロフィール**資料4」の紹介、人が住む北海道の5つの島の学習、フォトボイス活動の学習[8,9]を行った。各学習では、グループごとに学習記録を提出し、発表会を実施した。さらに、実習直前に、離島実習での自己目標を記入した。

9月以降の振り返り学習では、グループごとに実習先で学習した内容をスライドにまとめ、発表した。さらに12月末に地域密着型チーム医療実習（3学年）との合同の発表会で、離島における全ての活動について発表を行った。発表内容は『地域医療合同セミナー1/I』学習の記録[10]として出版された。また、利尻島の実習中撮影した写真の中から、とっておきの1枚の写真を選択し、『ボイス』をつけて提出した。この写真をもとに、冊子：利尻島における『フォトボイス』活動の記録－わたしのとっておきの1枚の写真－[7]が作成された。

(4) 分析対象者のプロフィール

2010年に行われた離島地域医療実習の参加者は、札幌医科大学1年生、医学部医学科、25名、保健医療学部看護学科、24名、作業療法学8名、理学療法学科7名、計64名である。この報告では、事前学習、離島実習、振り返り学習で学生に提出を課した全ての記録を対象として、長い時間をかけて全学生の記録を読み込んだ。学生の記録の中には、自分の気づきや学び、内省（振り返り）を十分言葉にできていないものも多かったため、この報告に登場する学生は参加学生の全てではないことを付記する。

3. 方法

(1) 記録の分析

① 全ての学生の提出物を読み、学生の「語り」の内容を **1. 島の医療に関すること**：医療実習体験（医療体験・医療者との懇談・患者や医療者との対話など）、国保中央病院院長の講演と懇談、島の医療に関する島民の体験談、**2. 生活体験と島民とのふれあい**：ウニの殻むき体験と島民との交流、島の散策での島民とのふれあい、**3. 島の自然の中で過ごす**：生物実習・生物採集・コウモリ観察・自然観察・フォトボイス活動・利尻の山や海との出会い、**4. 仲間と共に暮ら**

すという4つの場面に分類した。

② 次に4つの場面で学生が感じたこと、気づいたこと、心が動かされたことに関する全記述を学生の言葉のまま抽出し書き出した。

③ 書き出した学生の記録を何度も読み、共通する内容をまとめ、簡潔な「見出し」[4]をつけた。

④「見出し」をもとに、学生の記述を概念化した。「見出し」づけや概念化に際し、読み手である著者の感想や批評の感情をできるだけ排除し、学生の記録をありのままに抽出する作業をくり返し行い、最後に、それらの学生の言葉から学生は何を感じ、学んだのかについて、著者の考察を記した。

(2) 分析の対象とした記録の説明

① 離島地域医療実習準備教育

学生プロフィール（資料4）：1. 私の自己紹介（出身地、趣味、今一番興味をもっていることなど）、2. 私はこういう学びをしてきました（今までの学びや取り組みについて）、3. わたしはこういう医療者になりたい（自分がどんな医療者をめざしているのか）、4. このセミナーでわたしが学びたいこと（何を見、何を経験し、何を学びたいのか）の4項目について自由記載。

「地域（島）を知る」学習記録：人が住む5つの島について、1. 保健・医療・福祉、2. 人々の暮らし、3. 島の自然の学習をグループに分かれて行い、学習した内容や、発表会で他のグループの発表を聞いた感想などを記録。

「フォトボイス」学習記録：1. 活動のテーマとそのテーマを選んだ理由、2. グループの活動記録、3. 活動の感想など。

離島実習の自己目標（資料1）：1. 生き物を知る。2. 島の暮らしを知る。3. 島の仕事を体験する。4. 離島保健医療を学ぶ。5. 仲間作りをする。の5つの項目に対する事前の自己目標。

② 離島地域医療実習

活動の記録（資料3）：1. 主な活動の内容、2. 一日の活動の中で印象に残った活動、3. 活動の中でのきづき、4. 活動の中でうまくいったこと、いかなかったことなど、5. 今の気持ち、感情の5項目から構成されている。フォトボイス活動を行った時は、さらに1. 写真を撮った時間と場所、2. 写真を撮った時の気持ちや撮ろうと思った理由の記録。就寝前に記録するように指導。

事後レポート（資料2）：自己目標に対する自己評価と実習全体を通しての振り返り。

- **自己評価**：1. から5. の自己目標（**資料1**）に対して、良くできた、できた、どちらとも言えない、余りできなかった、全くできなかったの5段階評価とその理由。さらに ① 積極性、② 貢献性、協調性、周囲への配慮、③ 5日間の実習を通しての自己の成長についての記入。
- **今後に向けた自己課題**：実習の中で見つけた自己課題の記入。
- **実習全体を通しての振り返り**：体験から感じたこと、考えたこと、感動したこと、刺激を受けたこと、良かったこと。悪かったことなどを自由記載。

③ 離島地域医療実習の振り返り学習

「医療実習」発表の学習記録：1. グループ学習の概略、2. グループ学習における気づき、学び、3. 他のグループの発表を聞いた感想など。

わたしの一枚の写真：1. 写真の簡単な説明、2. この写真を「わたしの一枚の写真」に選んだ理由、3. 写真から何を感じ、何を深く読み取ることが出来たかの3つの項目。

4. 倫理的配慮

全ての記録を提出する際、対象学生には提出記録をもとになされる研究の趣旨を説明し、協力は自由意思であること、協力の有無による不利益は生じないこと、匿名性は保持されることを説明し、承諾を得た。また、お世話になった施設にも、同様の説明を行い、実習後の学生の経験として公表の機会があることの了承を得た。

5. 利尻島における学生の経験の語り

本章では、実習参加学生の利尻島における生活の記録と振り返りの記録から、学生たちが利尻島における人々の暮らしや島の医療、島の自然に触れ、その場で感じたこと、事前に描いていた島に対するイメージや地域医療に対する想いの変化や学びを記す。利尻島における学生の体験を、1. 医療実習の現場における体験、2. 生活体験や自由時間における島民とのふれあい、3. 島の自然との出会い、の3つに分け、それぞれの場面で学生たちが感じたこと、考えたことを記していくことで、上に述べた学生の学びや生き方に対する変化を見ていく。1. の医療実習の場における体験では、① 訪問看護ステーションと地域包括センター、② 診療所と病院、③ デイケアと老人健康施設では学生たちの経験や学びが異なるため、それぞれの医療施設で学んだ**Aさん**、**Bさん**、**Cさん**の3名の学生（医師をめざす学生2名、看護師をめざす学生1名）の経験や学び、気づきを中心に記したが、同じタイプの施設で学んだ他の学

生の学びや経験も加えた。医療実習での体験以外では全ての学生を対象とした。学生の「語り」の記述に対しては著者の立場から判断したり、解釈することを出来るだけ控え、そのまま物語風に示すことを心がけた。学生の「語り」の部分は『』でくくった。

5-1. 医療実習体験

学生たちは、数人の班に分かれ、島にある8つの施設で実習を行った。実習は基本的に実習先のスケジュールに合わせて行われたため、実習内容や時間も様々である。本節では、(1) 医療者が利用者の家庭を訪れて医療行為を行う訪問看護や地域包括センターでの実習、(2) 患者が訪れて医療行為を受ける診療所や病院での実習、(3) 利用者が通ったり生活したりする場所であるデイサービスや特別養護施設での実習を通して、学生たちが望まれる医療者になるためには、何が必要なのかに気付き、その達成のために今後何を学んで行けば良いのかに気づいて行く過程を見て行く。

(1) 訪問看護ステーション「やすらぎ」と地域包括センターでの実習

「やすらぎ」で実習を行ったAさんと地域包括センターで実習を行ったEさんの語りを中心に、2人が人を理解すること、人を想うことについて考え、その結果、人に寄り添う仕事の良さや難しさに気づき、それらの気づきを今後の生活に活かしていこうと考えた過程を見て行く。

Aさんは担当者と共に2軒の家を訪問した。もともと『訪問看護に携われたらいいな』と思っていたので、『五感をフルに活用し、訪問看護について何でもかんでも出来るだけ最大限吸収してこよう』という気持ちで、実習に参加し、医療実習では『担当者さんに聞きたいこと・知りたいことを何から何まで積極的に質問し、利用者さんとの会話や援助も率先して行うこと』ができた。Aさんにとって妻が認知症を患っている2軒目の訪問は特に思い出に残った。ご主人とは離島の医療について議論したり、介護の現状について、沢山お話をすることが出来た。『家には奥さんとご主人の若い頃のラブラブの写真や、娘さんを含め家族3人で小学校の入学式で撮った写真など』が飾られており、『家に入った時の暖かくて愛に満ちていて、でも少し切なくさせる雰囲気』、『ご主人と奥さんはしっかり思い合っていると感じられたご主人の話』などから、『人を理解することや人を想うことは何だろう』と深く考えさせられた。そして、2軒のお宅での体験から、訪問看護では、『利用者の生活に入り込み、一緒により良い生活を考えていく事が必要なのだ』という事を理解したが、一方で、『狭い地域なので、皆が何らかのつながりを持っているため、本心で話せない』などの問題点があることも知った。一緒に実習に参加したDさんも、『医療従事者と利用者さんの距離が非常に近い』という印象を持った。

地域包括センターで実習を行ったEさんも仕事の内容は、『対象である高齢者に留まらず、家族、主治医、ヘルパーさんなどにも及び、利用者の体調の管理だけではなく、食生活、経済面のサポートや一人暮らしの方にとっては、訪問が良き話し相手という役割も担っていること』を知った。そして『“島の人々は、漁をして暮らしてきた分、年を重ねる事で漁が出来なくなるのはとても辛い事、やるべきことがないと生き生きとして暮らすことが難しいので、すこしでも長く漁ができるように島民の健康を守りたい”という担当者の利用者に対する強い想い』を感じた。

Aさんは今回の実習で『訪問看護の大変さと魅力を十分に学ぶこと』が出来、訪問看護を『ますます素敵な仕事だな』と思い、『ちょっとためらいもあるけど、やはり訪問看護がしたい。』という思いを強くした。そして、訪問看護のいい面や困難な面、訪問看護をする上で必要なことなどを親身に教えてくださった担当者の方に心から感謝した。そして、今後『離島の医療について考えながら、良き看護師となれるよう一生懸命勉強を頑張る。同時に、心豊かで感受性が強く、人の気持ちがわかる素敵な大人になれるよう、就職前に与えられた大学生活を最大限活かし、のびのびと自由に色んなことに挑戦したい。物事をあらゆる側面から見られるように広い視野を持ちたい。』と決意した。そして、体験での決意を思い起こさせてくれるものとして、ご主人と一緒に撮った写真を「わたしのとっておきの1枚の写真」[11] として提出した。将来訪問看護に従事したいと考えているAさんにとって、この利用者さんが『対象者第1号となったから』である。最初、写真を撮らずに帰ったが、『利尻での訪問看護の経験を忘れたくなかったし、これから実習など大変なことにぶつかって落ち込んでしまった時などに写真を見て頑張ろう！って思えたらいいな』と思い、担当者さんにもう一度連れていって貰った。Aさんにとってこの写真は『ずっと大切にしたい一枚の写真』となった。

将来訪問看護に携わることを考えていなかったFさんも僻地での医療に取り組む担当者の姿に感動し、『自分も地域で医療をしてみたい』という気持ちになった。将来の職業となる看護師にとって、『必要なことは対象者の疾病に対する理解だけではなく、利用者自身を考え、接することだということ』に気付き、『今後は聞き

役、話し役それぞれになり、コミュニケーション力を強化したい』と思った。

(2) 診療所と国保中央病院での実習

診療所や病院での実習を行った学生たちは、地域における疾病はそこに住む人々の生活習慣と密接な関係があり、医療者は患者の生活習慣を通して、患者や患者の病気の状態を理解することが必要であることを知った。そして、体験後には自分が医療従事者になるのだという自覚が生まれ、それにむけて今後どのように生きて行くべきかを考えた。

診療所で実習を行ったＢさんは、『診療所や診察の様子はもちろん、そこで働いている医師が感じている責任や覚悟について学びたい』という目標を持って参加した。診療所での実習の内容は医師のお話を聞くこと、数人の患者さんの診察風景と処置を近くで見学（腰痛、肩痛、手の腱鞘炎など）、扁桃腺が腫れた人ののどの観察、背中にある脂肪のかたまりの触診、乳幼児のワクチン接種介助などであった。同じ場所で実習を経験したＧさんやＨさんは、利尻で多い昆布ぜんそくや腰痛の発症は、昆布を扱う環境やウニ漁の際の姿勢と深く関わっていることを知り、『医療には環境や暮らしに対する理解も必要なことを事実として知ること』が出来た。国保中央病院で実習を行ったＩさんも病名やカルテに「昆布」の文字が沢山あるのに気づいた。

Ｂさんは、漁業を主産業とする利尻では、漁のある日はよほどの事がない限り、病院に来ないという島ならではの実情も知った。すなわち、天気の良い日は、少々元気な人は手伝いのアルバイトにでかけるからである。実際、実習日は、晴天で、いつもより患者数が少なかったため、医師から、地域医療に従事する心構えや苦労話を聞くことができた。医師は、「その地域での生活を十分楽しめないとやっていけないこと、この先、きちんとした医療が地域で提供される世の中になるのか」についての危惧などを本音で語ってくれた。二人の看護師さんは、地域医療の理想について真剣に考えていたが、一方で母親としての悩みは大きく、将来も自分の子どもが利尻島に住み続けるにあたって、利尻島できちんとした医療が展開されることを切に願っていた。

国保中央病院で医師の診療の様子を見ることが出来たＩさんは、医師が病気とは関係ないこと（天気や患者の服の色や眼鏡の色）から情報を得ていたことに気がついた。このカリキュラムに参加する目的を『自分が考えている地域医療に対するイメージを、実際に体験することで変えていきたい』と述べていたＩさんは、医療の中から情報を得ようとしていたが、医師たちが生活の中から医療に対する情報を得ていたことを見学して、『もっと自分の視野を広げなければいけない』と思った。Ｊさんも『医師が患者さんにボディタッチをしたり、目を見たり、殆ど触れるくらいの距離で診察を行い、敬語ではなく、普通に友人同士で話すようなしゃべり方で患者さんに接している姿』が印象に残った。

ＢさんはＧさんと共に実習に参加したが、患者さんから「ひとりずつじゃなくて２人でくっついて利尻に来ちゃいなさい」と言われ、衝撃を受けながらも、『それだけ医師が切に必要とされ、待ち望まれていること』に気づき、『これから頑張ろうという気持ちになり、医学に対するモチベーションがあがった』。しかし、一方で『生半可な気持ちで地域医療にたずさわれないこと』、『自分自身がすごく勉強不足でこれから一杯努力しなければいけないこと』なども感じたが、実際の診療にふれることで、『将来自分は医療従事者になるのだという自覚が生まれ、これから本気で勉強しなければならないこと』を自覚した。医療実習は長時間に及んだため、『体力的にも精神的にも疲れを感じた』一日となったが、『実際に医療実習に取り組んだことによって、これからの勉強が一層楽しみになり、自分が医師を志した原点を考え直す機会』にもなった。利尻における体験は、『昔の日記を読んだりしながら初心を思い出すきっかけ』となり、『大学に入ってからは、教養過程の講義ばかりで、少し医学から遠い感じの毎日だったが、利尻での体験で自分自身のモチベーションが上がった』ように感じた。

(3) デイサービスや特別養護老人ホームでの実習

施設で実習を行った学生たちは、利用者の方の行動や言動に沿って、その場の状況を即座に理解し、対応することが必要であることを知ったが、多くの学生にとって、高齢者とのふれあいは初めての経験であり、戸惑うことばかりであった。しかし、それらの経験は、コミュニケーションとは何かを深く考える機会でもあった。

秀峰園のデイサービス部門で実習を行ったＣさんは、『施設の勤務者と利用者の双方の視点から離島の保健医療の在り方を学びたい』、『医療従事者の立場から利用者の方とどのように接すれば良いかを考えながら行動したい』と考えて実習に臨んだ。実習には２人の仲間と参加し、施設内の見学、利用者さんの歩行訓練のお手伝い、体操、ゲーム、おやつの準備のお手伝いなどを行った。さらに施設の方が質問タイムを設けて下さり、特養、利尻島の医療体制の理解を深めるのに大

変良い機会となった。

歩行訓練では歩行器を使って施設内の廊下を歩く利用者さんが転んでしまわないようにつきそったが、スタッフの方々は利用者さんにゆっくり話しかけながらゆっくり歩調を合わせてつきそっていた。施設ではスタッフの数が少なかったものの、『看護師や介護士の連携が非常に良く、利用者全員を見ながら仕事をしていた』のが印象的であった。また、「○○のお父さん、トイレに行っておくかい？」など、利用者が言い出す前にトイレに行く機会を作っていた。スタッフの方々の働き方を見て、『職種の壁をこえて、皆が同じ目標を持って働く事の必要性を感じ、さらにこのような施設における看護師や理学療法士などの専門職の重要性も知る機会』となった。『利用者さんに対するケアは十分行われている』と感じたが、一方で『利用者さんの間でうまくコミュニケーションが取れない状況が多く見られ、利用者さんができるだけ孤独を感じさせないようなスタッフの対応は十分とは言えない』と感じた。その原因は『スタッフの少なさによると思われるが、スタッフによる利用者間のコミュニケーションのファシリテートなど、施設側のさらなるプログラムが重要である』と感じた。

施設の利用者さんは皆、高齢の方々であり、実習を行った学生の殆どが普段接する機会があまりない高齢者とのコミュニケーションに苦労をした。例えば、ほのぼの荘のデイサービスで実習を行ったＫさんは、『いざ利用者さんと話そうとしても、何を話して良いか分からず、借りてきた猫のようになってしまったり、いざ何か話そうと思うと余計焦ってしまい、自分のコミュニケーション能力がまだまだ』ということを実感した。ほのぼの荘の特養で実習を行ったＬさんは、仲間と一緒に、普段は人手不足で実施出来ない利尻町立博物館へ車椅子を押してでかけた。その散歩の帰り道、学生たちは車椅子に乗る利用者さんと一緒に写真を撮った。その時の利用者さんたちは皆良い笑顔だった。Ｌさんはその時の写真を「わたしのとっておきの１枚の写真」[11] に選んだ。最初外に出ても『あまり笑顔が見られなかった利用者さんたちに話しかけることが出来ず、不甲斐ない気持ち』だったが、『時間とともに笑顔が見られるようになって自分に対して心を開いてくれた。そして散歩の最後には笑顔の写真を撮ることが出来た。この優しい笑顔は、利用者さんと時間を共にした学生たちのそのような経緯を経て自然に引き出された優しい笑顔だったのだ』と思った。

希望で体験を行ったＭさんは、『自分達が言われたら少しカチンとくること、札幌の施設では暴言と捉えられてしまいそうな言葉を、介護福祉士や担当の方が利用者さんに向ってどんどん言っていること』に驚いた。利用者の方々はその言葉に対して、さらに皮肉を重ねたり、笑い飛ばしていた。『利尻の方が皆おおらかで冗談がわかるのか、それともそのようにすることがむしろ心を開かせることにつながるのか、とにかく札幌では言ったら怒られてしまう事まで担当者と利用者が何でも言いあっていた事が印象的であり、離島ならではのお互いが理解しきった関係だから成り立つものなのかと思い』、感動した。

また、老人保健施設で実習を行ったＮさんは、『入居者のために何かしたいという思いは強くあったが、職員さんたちの邪魔になりはしないかという戸惑いが強かった。しかし思い切って笑顔で、大きな声で声をかけると、入居さんたちが笑いかけてくれた。』施設ではひとりのおばあちゃんが、仲間のＯさんをとても気に入って、可愛らしい笑顔でお話をされていた。ずっと楽しそうにＯさんと話しているおばあさんに、職員の方から「イケメンがいていいね」とからかわれて照れているところがほほえましくて、思わず写真を撮ってしまった。『施設に入っておられる方にとっては、見る顔ぶれが毎日同じなので、自分達が楽しい刺激を与えられたのかもしれない』と嬉しい気持ちになった。そして、『自分もあんなふうに笑えるおばあちゃんになりたいという気持ち』で、二人の写真を「わたしのとっておきの１枚の写真」[11] として提出した。

一方、Ｃさんは利用者さんや園長さんと一杯話しが出来たが、『言語障害を持つ利用者さんと他の利用者さんとの間に立って、コミュニケーションのファシリテートが出来ず、相方がどういう気持ちになったか』とても気になり、『もっと下調べをしていけば、得るものももっと多かったかもしれない』と思った。『実際現場に行ってみないと、自分自身が何を目指すべきなのか、今現在自分にできることはどんなことなのかについて考えるのは困難であり、今回参加した様な活動を通して、自身を客観的に見つめることが出来、これからの学びの方向性の発掘が出来たのではないか』と思った。

ほのぼの荘ー特養で実習を行ったＰさんは、『医療の場の空気を体感したことによって、医療とはどういうものかというものを自分なりに考えることが出来、医療とは思いやりとか優しさが大切なのではないか』と考えた。高齢者の方々や施設のスタッフの方々は明るい人が多く、『自分もその姿勢を参考にして行きたい』と思い、『おぼろげながらも将来自分がならなければならない医療人像が見えた』気がした。

5-2. 島民とのふれあいと島民から課された課題

学生たちは、島の漁師さんの指導で、ウニの選別ならびにウニの殻むき、食部とりだし作業の体験から、島の方々の生活を知り、医療実習で見聞きした生活と疾病との関係について、身をもって体感した。さらに、昼食時や空き時間、フォトボイス活動などで、積極的に島を歩いたり、温泉施設などで、島民と話すなど、島民の方々とさまざまな交流を行い、島民のやさしさや島民の医療に対する想い、自分たちに対する期待を知り、島民のおもてなしに対する恩返しは何なのかを模索した。

(1) ウニの選別と食部の取り出しの体験

ウニの選別作業では、漁から戻った漁師さんの指導で、ウニの大きさを測り、小さいものは海に戻す作業を行った。すでに漁の時間を過ぎていたが、実際に小さな舟にひとりで乗り、ウニを採る作業も見せていただいた。漁師さんは上半身を海に投げ出し、「箱めがね」を口にくわえて海の中を覗きながら、タモと呼ばれる細長い棒の先に網がついている道具で１つ１つウニを獲る。作業中はずっと磯舟上で寝そべった状態であり、「箱メガネ」が潮に流されないよう歯で食いしばり、脚で舵を操る。その姿に学生たちは驚き、大変な作業であることを実感するとともに、『利尻のウニ産業は漁師さん一人一人のこのような努力によって支えられていること』を知った。

食部のとりだし作業では、その作業の難しさもさることながら、単純な作業を長時間行う苦労も体験できた。体験時間は、わずか 30 分程であったが、皆、ウニの棘が刺さって手が痛み、また、中腰の作業のため、腰や背中が痛くなった。**Ｎさん**は『漁師や食部とりだし作業を支える女性たちの仕事の大変さを実感』できたし、**Ｑさん**は『作業をしている方々の多くが高齢者であったことから、自分たちの体験した辛さとあわせて、その方達への体の負担の大きさを身を持って体験できたが、同時に働く方々の仕事に対する熱意と生き甲斐、そして楽しさも伝わってきた』と記している。**Ｈさん**は、島民には腰痛持ちが多いことを医療実習で知ったが、『ウニ漁時の不自然な姿勢や、自分たちが体験したウニの食部取り出しの体験から、島民の仕事と疾病は非常に関係していることを実感すること』が出来た。体験学習の後に、ウニ丼を食べた**Ｂさん**は、『食べてしまうとあっというまではあるが、ウニ丼になるまでに多くの人がかかわっていること』、『多くの人に支えられて食卓に届いていること』に思いを馳せ、『沢山の方々の頑張りがウニ丼の背景にあることを忘れないようにしたい』と語った。一方で、**Ｒさん**は自分達と一緒に仕事をしている作業場の方から、「わしら５人ならとっくに終わっている」、「鮮度が落ちるからイライラする」という答えが返ってきたため、『自分達は本当の漁業の大変さが分かっていなかった』と振り返る。また、**Ｓさん**は『自分達が取り出したウニは売り物になる様なものはなにもないし、時間も沢山かかってしまったと思う。それなのに利尻の人たちは親切で、自分達に貴重な体験をさせてくれて、優しさを沢山感じることが出来た』と語った。**Ｔさん**は、『利尻の人たちの利尻への思いや暖かさを一番感じた時の写真』として、ウニの殻むきを親切に教えて下さった方の写真を「わたしのとっておきの１枚の写真」[11] に選んだ。

(2) 自由時間に街を歩いて知った島民のやさしさと島民の医療に対する想い

学生たちは様々な場所や場面で、島民の想像を越えたたくさんの優しさにふれ、その優しさに対する恩返しについて考えた。

実習では、一日を除き、昼食は学生たちで食べる所を捜さねばならなかったので、数人のグループは宿舎の目の前にある駐在所で「昼食にどこに行ったら良いか」と尋ねた。おまわりさんはお店の方に電話で交渉して下さり、高価なウニ丼やいくら丼を安く食べることが出来た。グループのだれもが、『おまわりさんの優しさ、都会では考えられない優しい対応に感謝し、印象深かった出来事』として記録した。そしてそのとき食べたどんぶりからあふれんばかりに盛られたウニ丼やいくら丼を食べて、『幸せな気分』になった。

宿舎には入浴設備がなく、学生は近くの温泉を利用した。宿泊地の一つである鴛泊の温泉は、宿舎から少し歩かなければならなかった。夜道は街灯も少なく、学生たちは道に迷ってしまい、途中で民宿のおじさんに道を聞いたところ、親切に道を教えてくれたばかりではなく、学生がうまく辿りつけたかどうか心配して追いかけてきて、車で送ってくれた。**Ｎさん**はそのような島民の行為に対して、『損得や効率を考えながら行動する大多数の都会の住民とは明らかに異なり、それは利尻島という環境が育てたおおらかさ、優しさなのかもしれない』とそのときの気持ちを振り返っている。そして、『期待はされていないかもしれないが、そんな方達のために何か役にたてるように、日々医学の学習に努めることが今の自分にできることだ』と思った。利尻島よりもはるかに医療施設の質は劣っている地域で育った**Ｎさん**は、いつも田舎での医師不足を感

じていたので、『僻地で住民が何を求めているのか、実際に働いている医療者はそれにどの程度答えられるものなのかを少しでも感じたい』と考えて実習に参加したが、実習先での体験や島民との交流を通し、『自分を育ててくれた地域に少しでも恩返しをしたい』と改めて感じた。Cさんは、皆と港のクラゲを観察した時に、自分の病気の症状を詳しく話してくれた漁師さんの話から、『島民の方々は，自分が想像していた以上に島の医療体制に不安を抱いていること』を知った。

また、実習中の学生の朝食と夕食は、基本的にはお弁当だったが、島についた翌朝の食事は島民からの差し入れのパンだった。明日の朝食はクリームパン、アンパン、牛乳らしいと知って、最初Cさんは『なかなか質素だなあと思ったが、それらのパンが島の方からの差し入れだと知り、涙が出そうになってしまった。』そして、『朝ご飯を寄附して下さった優しい方々に感謝!!』と記録した。また、実習中のある日のお昼は、島の方々が、うにぎり（ウニの入ったおにぎり）や魚のフライを作ってごちそうしてくれた。UさんやVさんは『それらのごちそう全てが美味しく、帰学後もう一度食べたい』と思った。

(3) 島民の期待に沿うために自分達に課せられた課題

学生たちは医療実習や今まで述べてきた島の人々との交流を通し、様々な気づきを得た。そのいくつかについてはすでに述べているが、ここでは帰学後に実習を振り返って書かれた記録をもとに、島民の期待に答えるためにどうすべきかを模索する学生の姿を記す。

Cさんは実習を振り返り、『島の方々は皆さんが自分たちにとっても親切にして下さった。そして多くの方々がふと口にしていたのが“医師になったら、島にもどってきてね”という言葉だった。島の皆さんが、将来の医療従事者としてのわたしたちに大きな期待を抱いて下さっているのと同時に、島の医療を良くしたい！と強く思っていらっしゃるのが痛い程伝わってきた』と述べている。そのような島民の思いに対して、島で感じ学んだことをこれからの学習にどう生かしていくかを考えさせられる「わたしのとっておきの1枚の写真」[11]として、「いつか、また」という題名をつけた写真を選んだ。この写真は学生が島を離れるとき、学生が乗ったフェリーに対して、実習担当責任者の教員2人が必死になって見送る姿を船の甲板から撮ったものである。その写真を選んだ理由として、『島民の皆さんを始めとし、地域医療問題を憂う先生方が、私たちに寄せる期待を一身に受けている。そんな気を思い起こさせる一枚だからです』と述べている。

Hさんは、利尻島は一見すると不便な離島ではあるが、離島でずっと暮らしていきたいと思っている地元の方々に接することで、『以前よりも離島保健医療に貢献してみたい』と思うようになった。利尻ほどではないが地方出身であるHさんは『田舎の不便さも自覚してはいるが、結果的に居心地がいいのは地元であるという気持ちもよく知っている』ので、島の人々の思いに大変共感した。『利尻の方々と同じように、不便な僻地に住みながらも地元を愛し、そこで暮らしていきたいと思う人は大勢いるだろう。北海道の地域医療を根底から支える医師になりたいという願いを持って、一連の企画に参加したが、5日間の経験を振り返り、地域を愛し、そこに暮らし続けたいと願っている人たちの生活を支えるという仕事に、以前よりも興味を持つこと』が出来た。

Pさんは、『今回、いろいろなところで、離島における医療や、島民の方々の生活について聞く機会があったので、ここで終わりにするのではなく、自分でも離島の特色について調べたいことがあれば積極的に調べて行きたい。また、学習を自分だけで終わらせるのではなく、同じく離島について学習した人達とお互いに感じたことを話し合ってみたい』と思った。Dさんも『今回せっかく利尻に行って地域医療について学んだので、今後も地域医療について関心を持ち、地域医療をもっと学んでいきたい』と思った。Wさんは『地域の医療に自分がどのように貢献できるのかを今後考えていかねばならない』、『実際に地方の病院に行くだけでなく違ったアプローチもあるのかもしれないので、いろいろと考えていきたい。そこに人が住んでいる限りできる限りの医療を提供するのが日本全国の医療従事者の務めだと思う』と述べている。

老健施設で実習を行ったNさんは、『老人保健施設における実習は、自身は初めて触れるものばかりでとても良い刺激になり、考える機会を得た。しかし施設で働く職員や島民の方々は、自分たちのことをどうとらえているのだろうか』と考えてしまった。『大学は北海道の地域医療に対して積極的な制度や授業を行っている。しかし現実に、今回実習へ参加した生徒の何割が離島やへき地医療の現場へ巣立つのか、何人が利尻島へ来るのか、ひょっとすると一人も来ないのではないか。自分自身も思うこの疑問を島の方たちも持っているだろう。そんな中で、施設の方たちは非常に温かく我々に物事を教えて下さった。迷った時に道を尋ねた島民の方も、とても親切に教えて下さった。損得や効率を考えながら行動する大多数の都会の住民とは明らかに異なり、それは利尻島という環境が育てたおおら

かさ、温かさなのかもしれない』と感じた。そして『期待はされていないかもしれないが、そんな方達のために何か役に立てるよう、日々医科の学習に努めることが今の自分に出来ることだ』と思った。

地域包括センターで実習を行ったＦさんは、『利尻では保健医療関係者が強く信頼されていることをとても羨ましく感じ、今まで離島の看護をぼんやりとしか考えていなかったが、利尻に行って現実味を帯び』、『参加する動機がウニを食べたいからであっても、利尻は行けば必ず何かを得られる場だ』と思った。その理由として、『利尻の人がとても暖かく迎えてくれたから』であり、『夏休みでだらけている自分にこれだけ自分達を必要としてくれているというやる気を与えてくれから』であると記している。

この実習で、地域医療に関心のある学生たちが共に利尻を訪れ、同じ体験したことによる気づきも多くあった。Ｇさんは、『何よりも収穫だったのは、将来地域医療に身をおこうとしている同期と一緒に現場を訪れ、同じことを体験し、話し合うことが出来たことだと思う』と述べている。『他学部は勿論、同学部でもあまり話し合ったことがなかった人と地域について語り合い、仲良くなれたのは大きな収穫であり、将来は地域医療に何らかの形でかかわろうと考えているので、同志を得たことがとても嬉しかった』。しかし一方で、Ｃさんや Ｘさんは立場が異なる学生との対話を通し、『意識の違いや実習に臨む態度の違い』を感じてしまった。Ｃさんは、他学部の人がどのような雰囲気の生活を送っているのか分かり、理解が深まったと感じ、同学部の人とも理解が深まったが、一方で『実習を「勉強」と捉えることに対して温度差も強く感じてしまい、内輪盛り上がり的な雰囲気が多かったことを残念に思うと共に、実習に対する温度差が個人間でこんなにもあるのか』と痛感した。そして、『仕事にしても、生活にしても、学習にしても、取り組み方はもっと深く考えるべきだと強く思い、実習前から、もっと実習の目的、目標をみんなで共有した方がよかったかな』と反省した。Ｘさんも、『自分で目的を持って実習に臨んだ人と、何となく遊びにきた感じの人との差が大きかった』ように感じ、『この差は、いざ連携が必要な時、例えば実際の現場などで両者の間に大きな摩擦を生じる原因になる』ように思った。そして自分の反省として『そのような差を感じた時の振る舞い方をもっと考えなければならなかったのではないか』と思った。

5-3. 自然の中で育まれた学生の想い

本実習が、利尻島という自然豊かな場所で行われたが、学生たちは自然やゆっくりとした時の流れの中で自分と向き合い、様々なことを想った。学生の「語り」の中から、それらについて示す。

(1) 利尻山は島民の願い、希望、決意、信念の象徴

学生たちは迎えてくれた雄大にそびえる利尻富士山の美しい姿に皆、『息をのむ思い』であり、その後の島民とのふれあいを通して、『利尻山は島民の願い、希望、決意、信念の象徴であること』を理解した。利尻富士山は、島の中央に位置しており、滞在中、学生たちは場所によって様々な姿に変化する利尻富士山を見ることができた。Ｙさんは実際に山を見て、『島民にとって利尻富士山は島民の願い、希望、利尻を思う気持ち、決意や信念の象徴なのだ』ということを肌で感じ、そして、利尻富士山に向かった時、『島民がなぜこの山を愛し、頼りにしているかを少し理解できた』ように感じた。Ｚさんは、島のどこからでもいつでも見える利尻富士を見て、湖のお土産屋のおじさんが、誇らしげに山のことを話していたことを思い、『島民の方々がいつも山を見、愛していること』を理解した。10 人の学生が、利尻富士山の姿を「わたしのとっておきの一枚の写真」[11] として提出したことからも、島民のみならず、学生たちにとっても利尻山富士は心に大きく残る存在であったことが伺える。

(2) 仲間との一体感を生んだペシ岬の朝日

港の近くにあるペシ岬に朝日が昇るのを見るため、11 人の学生が朝早く起きてペシ岬に登った。登るのは、大変であったが、昇ってくる朝日を見たことは学生たちの一生の思い出となり、『自然から目に見えないパワーを貰った気』がした。8 名の学生がペシ岬で友人たちとともに朝日が昇るのを見たときの想いを、「わたしのとっておきの一枚の写真」[11] に選んでいることから、そのときの学生たちの想いが伝わってくる。AAさんやＵさんは帰学後、『日の出の写真を見るたびに、利尻でグループの皆が仲良くなった楽しかった記憶』を思い出す。ABさんは、『言葉に表せない感動』を味わい、『暗い海の向こうから、明るい陽が登り始める姿は、何が起るか分からない一日の始まりを象徴しているように見え、海に反射した光は「明るい道しるべ」のようになっていた。』と記している。

(3) 心がやすらぐ利尻の海や夜の森や星空

学生たちの多くは利尻の海の美しさに驚き、海に囲まれた利尻島では、『どこにいても潮のにおいがする』ことに気づいた。そして『潮の香りのにおいの中にた

だ居るだけで、気持ちが良く、リラックスできた。』

利尻の夜も、学生たちにとって、思い出に残るものとなった。ふと真っ黒な空を見上げると、空には無数の星が見え、札幌ではなかなか見ることの出来ないカシオペア座や北斗七星や天の川が見えた。殆どの学生たちにとって『このような星空を見るのは初めての経験』であった。C さんは講演会の後、病院長のメッセージを心に留めながら、首の後ろが痛くなるほど反り返って空を見上げ、『胸が一杯になった気持ちを空に吐き出す』と、仲間も同じように空を見上げた。『夜の空はとても静かで、遠くから波の音が聞こえた。笑ったり、話したり、最後は皆無口になって、海岸に続く坂を下りながらこれからのことを考えていた』。温泉へ向かう往復の道でも、『だれもが星を見るために上を向いて』歩いた。

コウモリ観察のために入った夜の森では、明かりを消してコウモリを待った。A さんは夜の森に入ることに最初とても抵抗があった。『夜の森は暗く、最初は真っ暗で怖かったが、時間の経過とともに空気のおいしいことに気づき、静かで落ち着いた気分になり、こころが洗われたように感じ、心身ともにリラックスできた』。AB さんは利尻の『自然の中にいると楽な気持ち』になり、K さんは『自然が多い利尻では、時の流れがすごくゆったりとしている』と感じた。

6. 考察および結論

この報告は、事前教育を経て利尻島における 5 日間の地域医療実習に臨んだ学生の「語り」の記録である。最初に、利尻島での実習を体験した学生たちは、大学受験を経て入学したばかりの 1 年生であることを確認しておきたい。参加した全ての学生の記録を読んだが、中には遊びこころが優先してしまい、施設の担当者からお叱りを受けてしまった学生もいたし、ウニの美味しさだけにこころを奪われてしまったような者もいた。その結果、利尻での生活の記録を含めた提出物に対し、自分を振り返り、離島での学びを十分に表現できなかった学生も多くいた。そのため、この報告は、参加学生の全ての学びを網羅したものではないことを記しておく。しかし、学びや印象を言語化して記録に留めることが出来なかった学生にも、体験は必ず心に残り、学びや気づきはあったはずである。

学生は、医療実習や生活体験、自由時間における島民との交流を通し、多くのことを学んだが、学生の多くが感じたのは、自分達に対する島民の歓待の気持ち（ホスピタリティー）であった。ここではそのホスピタリティーに対して学生が感じた記録を中心に、利尻島での体験を通して学生たちが島民から課せられた宿題に対して答えを出すに至る過程について考察する。

参加学生の多くは、地域医療に一定の関心はあるものの、将来実際に地域医療に従事するかどうかは未知数の者たちである。しかし、島民はそのような学生たちを実に親切に心からもてなしてくれた。実習先での担当者の熱心な指導、利用者さんの笑顔とありがとうの言葉、おまわりさんのホスピタリティー、ウニ丼を安く食べさせてくれたお店の方、民宿のおじさんの親切、朝食のパンの差し入れやお昼ごはんのウニぎりのおもてなしなどに対して、最初はただ単に、その親切に甘え，『島民は親切だ』とか『島民の持つおおらかさややさしさ』だと解釈していた学生たちも、『なぜ、そんなに島民の方は自分達にこのように親切なのか？』、『島民は自分達に何を期待し、おもてなしをしてくれているのか』などの考えが浮び、B さんが 5-1（2）、C さんが 5-2（3）、N さんが 5-2（2）で述べているように、その具体的な期待とは、医学や医療者の卵である自分達に『いずれ島に来て欲しい』ということではないかと考えた。そして、それらの島民の期待に対して、何らかの形で恩返しをすることが自分達に必要なことであり、具体的にどのような形でそれに答えていくのか、その期待に答えるためには今後どのような生き方をすべきなのかなどを考えたと思われる。しかし、多くの学生は先に述べたように、地域医療に一定の憧れや関心はあるものの、いざ医療者として自分が島に行こうと考えたとき、地域医療の場に行くという決断のハードルは高い。『便利な都会がいい』、『先端の医療から隔離される不安』など、様々な感情が浮かび、5-2（3）で N さんが述べているように、『結局実際には島に行く人は殆どいないのではないか』という思いにとらわれてしまった学生もいた。しかし、学生は島民から受けた歓待に対して、自分が報いる方法を真剣に模索する。そして辿り着いた答えは、5-2（3）で示したように、大学における学びも含めて、『今、自分が出来ることを精一杯することだ』という結論であった。すなわち、島民の思いを感じながらの医療実習の体験により、多くの学生が将来の自分の医療者としての具体的な姿を描くことができ、その姿に近づく、あるいは実現するために帰学後どのように学生生活を送っていくのかについての課題を得たといえる。多くの学生が語っていたように、この気づきは、まさに実際に現地に赴き、様々な体験をし、島の人々とのふれ合いの中から生まれたものと考える。

実習に参加した学生たちは、入学試験を突破するために、受験勉強にいそしみ、期待に胸を膨らませて入

学した者たちである。しかし、受験勉強の疲れと基礎科目が多い大学での講義にともすれば、初心を忘れて、自分の進路に対しての確信が持てない様な状況におかれていた学生もいた。そんな中での医療体験は、学生に「自分は医療者になる」という半ば忘れかけていた想いを思い起こさせ、自分がかつて描いていた医療者になるための努力をする覚悟、もう一度がんばろうというモチベーションを呼び起こしたと言えよう。その覚悟を実行するために、実習で生まれた学部や学科を越えた仲間とのつながりは大きな力となるだろう。多くの学生は、将来のことははっきり分からなくても、『同じ目標に向かって努力できる仲間がいるのは心強い』と感じ、普段あまり交流のない他学部との交流が出来、世界が広がり、有意義な時間を過ごすことができ、友人を増やすことができた。一方で学部の異なる学生の現地での生活態度や考え方に温度差を感じた学生もいた。そのことは、教員からみても感じることであったが、将来医療の全責任を負う立場となる医者と他の医療従事者との医療に対する覚悟の違いが、学生時代から表れているのかもしれない。

人は気づくことでしか変化出来ないと言われており、「気づき」得るために様々な現場で様々な取り組みが行われているが、高塚[12]が、島根県立赤崎高校と鳥取大学医学部で実践している「いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション授業」は、学生に様々な気づきを与えている。特に、保育園や高齢者施設での「実践編」での体験により学生は多くの気づきを得ている。本実習と異なり、鳥取大学の保育園や高齢者施設での園児や高齢者との交流は同じ施設で複数回行われているため、交流の度に新たな発見や気づきがあったものの、その授業を通して学生が学んだものは、この報告で示した学生の体験によるものと多くの共通点があった。看護現場で看護学生が体験した「気づき」をつづったエッセイについて、編集を行った柳田邦男氏は、体験における「気づき」が、医療者としての「心の財産」になるのではないかと述べており[13]、いずれも体験が持つ力を示していると思われる。

鳥取大学の取り組みとは異なり、本実習が、学生生活を送る札幌から遠く離れた利尻島で行われたことにも意味があると考える。先にも述べた受験戦争に疲れた学生たちが、自然の中に身をおいたとき、意識していなかった自分の中の生命活動に気づき、それに向きあい、自然からの力を感じることができたのかもしれない。あるいは、かつて野原を駆け回った子どものころの自分を思い出したのかもしれない。ゆったりと流れる島時間の中で、学生たちは素直に自分に向き合い、自分の生き方を考えることができたのだろう。

すでに述べたように、この実習に参加した学生が、実際に地域医療の従事者になるという決心をするためには、今後恐らく様々な困難や迷いを経験するだろう。最先端の医療に従事することが偉いと考える者もいるかもしれない。そのような不安に対する一つの解決策はこのカリキュラムの準備教育の段階で行われた講演[14]の中で示された、「人生の一時期で良いから地域へ」というメッセージが、地域医療に対するハードルを下げる考えの一つとしてあって良いのではないかと考える。そして、この医療実習に参加した学生の中から、将来一時期でも地域医療に従事する医療者が生まれた時、この実習が意味を持つことになると考える。

謝辞

最初に、レポートの分析を承諾して下さいました学生の皆様に感謝致します。この報告の学生の「語り」に示されているように、利尻での実習では、利尻富士町および利尻町役場、沢山の保健医療福祉施設、漁業部、利尻町立博物館、そして多くの島民の皆様、ボランティアの皆様にお世話になりました。それらの多くの方々に感謝致します。さらに、地域医療合同セミナー 1/I および離島地域医療実習を担当されました多くの教員の皆様に感謝致します。

最後にこの論文は、医療人育成センター、教養教育研究部門、道信良子先生の辛抱強い励ましとご指導がなければ、出来上がりませんでした。ここに深く感謝申し上げます。

文献

1. 仲田みぎわ、山田惠子、高橋延昭他：利尻島における離島地域医療実習から得た学生の学び ― 参加学生の実習後レポートの分析 ―．札幌医科大学保健医療学部紀要 12:27-35, 2010
2. 田野英里香、石川朗、片倉洋子他：医学部・保健医療学部 1 年生の離島地域医療実習における「気づき」― 実習後のレポートおよびグループ学習発表記録の分析から ―．札幌医科大学保健医療学部紀要 13:95-103, 2011
3. 山田惠子、高橋延昭、宮下洋子他：医学部・保健医療学部 1 年生を対象とした利尻島における離島地域医療実習 ― ゼロからの出発 ―．札幌医科大学保健医療学部紀要 12:37-43, 2010
4. 小田博志：エスノグラフィー入門〈現場〉を質的に研究する．春秋社 , 2010, p171-213
5. 道信良子：ヘルス・エスノグラフィ ― 子どもの

フォトボイスを事例として．第 16 回作業科学セミナー特別講演 作業科学研究 6:15-19, 2012
6. 道信良子：文化人類学のフィールドワークを応用した地域体験型学習．医学教育 44:292-298, 2013
7. 道信良子：健康と医療の人類学．看護研究 49:552-556, 2016
8. Wang C, Burris, M.A.:Photovoice; Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. Health Education & Behavior, 24:369-387, 1997
9. 道信良子、澤田いずみ、今野美紀他：札幌医科大学保健医療学部「地域医療合同セミナー 1/I」における医療職種理解のためのフォトボイスの活用。札幌医科大学保健医療学部紀要 12:45-49, 2010
10. 編集責任者、山田惠子：札幌医科大学地域医療合同セミナー 1/I「学習の記録」.（社福）北海道リハビリー , 2011
11. 編集責任者、山田惠子：利尻島における『フィトボイス』活動の記録、わたしのとっておきの 1 枚の写真.（社福）北海道リハビリー , 2011
12. 高塚 人志：いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション授業．大修館書店 , 2007
13. 柳田邦男：「気づき」が生む心の “よすが” - 感性を育む、看護が変わる -．週刊医学界新聞 , 第 2946 号 , 2011
14. 山本利和：地域医療合同セミナー 1/I オリエンテーション講演「地域医療に必要なこと」. 2010